12　次の文章を読んで問いに答えよ。　　　　　〈東北大〉二〇二一年度出題

　その日も横になることが日課であるかのように、横たわっていた。じっと横たわることが仕事なのだと自分に言い聞かせて、ごろごろしているのである。午後のことである。突如家屋の下の地面が⑴カンボツしたと感じられるほどの揺れが来て、その後大きな横揺れが続いた。部屋の本棚が揺れながら倒れかかるのではないかと感じられるほどの横揺れである。私は機敏にからだを動かして移動することもできない状態だから、ともかく小康状態になるまで待つしかない。大揺れが収まると、ともかくもからだを移動させて、階下のテレビを付けてみた。高台の幹線道路を走るトラックが列となって停止しており、周囲の田畑を覆うように海水が遡っている。いずれ幹線の列をなしたトラックも海水に浮かび押し流されていくに違いない。このヘリコプター映像には、端っこの方で煙が上がっている。海岸沿いの原発施設はどのようになっているのかと疑念が浮かぶ。二〇一一年三月十一日の大震災の開始の一場面である。こうした何世代かに一度の事象に直面したとき、誰にとっても過去の経験は役には立たない。またそこでの思いは、（ア）持って行き場がない。

　それからずいぶんと時間は経過した。これほどの大規模な緊急事態に対して、哲学はいったい何ができるのか。これはそれ以降現在も抱えたままの問いであり、課題である。どのようにささやかにすぎることであっても確実にこれだという手続きや手順が見つかれば、思いは持って行き場を見つけたことになる。もちろん一般的になすべきことは無数にある。だがそれが惰性になれば、確実にたんなる自己満足に入り込んでしまう。こんな思いを抱えながら、なお試行錯誤を繰り返すよりない。たとえ持って行き場がなくても、なお前に進むことはできるに違いない。

　かつて吟遊詩人と呼ばれた人たちがいる。一般には、宮廷音楽師ではなく、諸国を遍歴しながら歴史的な事件や史実についての物語を編み出し、歌い伝えるものたちである。ヨーロッパ中世の八世紀ころから十五世紀ころにかけて、歴史的な記録が残っており、ヨーロッパ各地でさまざまな呼び名で呼ばれていた。ギリシャでは、アオイドスと呼ばれ、近代語では、ジョングルールやミンストレルと呼ばれた人たちがそれに相当する。日本で言えば、平家物語を歌う法師がそれにあたる。職業としては流しの歌手だが、ときとして各地の事件や諸相を歌い上げて、詩歌の作詞、作曲を行い、語り継ぐ者たちもいたようである。一般的には歌を紡ぎ、声をかたちにして伝えていくものたちである。少し特殊な職能をもつものもいて、やのような連歌師は、連歌の作り手として各地の大名に招かれ、連歌を教えていた。芭蕉やのような俳諧師も各地を転々としながら一宿一飯の恩義のように、作品を残した。

　おそらくそうした仕事のなかにも、思い余ったまま言葉にならない事態に直面したり、身の丈をはるかに超え出た自然事象に立ち尽くすよりない場面でも、その場にいて、なにかしら言葉を紡ぎ出し、思いにかたちをあたえてくれる人たちもいたと思われる。それはたとえ言葉を失ってもなおそこにいるだけで、無言のまま何かを語る人たちである。あるいはその場の声にならない声を感じ取り、その場になにかのきっかけをあたえる者たちである。さらには予想外の言葉の断片が、新たな脈絡をすようにその場の雰囲気に⑵リンカクをあたえ、リセットしていく人たちである。周囲の人はおのずと感謝の意をこめてもてなし、ひと時のねぎらいで恩に報いることになる。万葉集や古今集にも、そうした表現はある。

　山上憶良という万葉の歌人がいる。国家や天皇家の行く末がいままさに盛んであることを高らかに歌い上げる宮廷歌人とは異なり、（イ）貧窮と寒さに耐えることを歌ったような長詩や短歌を残している。ささやかな日常に目を向け、言葉にしても誰に届くわけでもないような情感をかたちにしている。官僚であった本人自身が貧窮であったとは考えにくいので、立ち会ったその場の雰囲気や、聞かされた情景を詠んだものだと思われる。

　貧窮を言葉にすることは、誰かに向かって改善を求めて自分の貧しさを訴えようとしているのではない。少なくとも憶良の歌にはそうした意向は出ていない。ましてや自分の困窮を嘆いているのでもない。だが持って行き場のない思いはある。その思いに区切りをあたえるような歌になっている。こうした万葉集では例外的な情感を歌っているために、山上憶良は「帰化人系」の人ではないかと言われたことがある。だが歌はあらかじめ届く先を決めておく必要もなく、またみずからの慰めにまる必要もない。

　吟遊詩人に匹敵するだけの言葉を、哲学はもつことができるのだろうか。それをさしあたり「吟遊哲学」と呼んでおく。自説が受け入れられず迫害をあまんじてみ込み、エトナ山に向かう老いたるエンペドクレスや、終生居場所がなく一宿一飯の恩義のように『痴愚神』を書き上げたエラスムスや、失意のなかでパリからスイスに帰ってくるルソーは、そうした事例なのかもしれない。各人の人生上の行きがかりは、それぞれに固有の形をとるが、いずれもどこかに「放浪する言葉」が含まれている。一貫して世界や人間についての説明をあたえようとするのではなく、また整合的な説明図式をあたえようとしているのでもない。だが日々の日記やエッセイや自伝のようなものではない。彼らには放浪する言葉だけではなく、「哲学を捨てていく言葉」が含まれている。吟遊する哲学とは、ある種の「捨てる覚悟」のことかとも思える。時間と労力をかけて獲得し、修得したものを、みずから捨てるのである。この捨てるところが、新たな経験の出現の場所でもある。ルソーの『孤独な散歩者の夢想』の「第三の散歩」の⑶ボウトウでは、次のように語っている。

　「われ常に学びつつ老いぬ」

　ソロンは晩年、この言葉を何度も繰り返している。年老いた私の身にも、この詩句の意味は思い当たるものがある。だが、私が二十年かけて⑷ツチカってきた知識は実に悲しいものだ。こんなことなら無知のままでいたほうがましだった。逆境は、いい教師だが、その授業料は高い。多くの場合、学んだことの有益性よりも、支払う代価のほうが高くつく。

（永田千奈訳、光文社古典新訳文庫）

　ルソーの場合には特殊な事情も絡む。主著である『エミール』や『社会契約論』がとなり、逮捕状が出たのである。追われるようにヌーシャテルに避難し、プロイセンに滞在許可をもとめて、フリードリヒ二世から許可をえる。ルソー五十歳の時である。ルソーの場合、ここからさらに十年近く騒動の⑸カチュウに巻き込まれるが、ルソー自身も反撃を繰り返し、ジュネーヴ評議会もそれに応戦している。波乱万丈の後半生である。

　晩年の『告白』や『孤独な散歩者の夢想』は、弁明をめた自伝の体裁をとっているが、そのなかにも「知を捨てていくこと」の経験ののびやかさや、小さな心の起伏の弾力のようなものが出現している。ことにルソーの場合、たとえ老境にあっても、植物の観察に躍動しながら機微に触れる心の作動の快が回復されていく。

　（ウ）捨てることのなかで初めて見えてくるものもある。かつてアーティストのマルセル・デュシャンが、自転車をひっくり返し、いくつかの部品を取り去って、捨てながらおのずと止まる場面を探しだし、それをそのまま作品としたことがあった。自転車は、技術的には完成品に近く、小さな改良はあるが、機能的には完成の回路に入った技術であり、道具である。そこにはもはや多くの選択肢は残されてはいない。そこでその手前に戻ってみる。制作のプロセスは、ほとんどの場合、完成品に近づくように組み立てられる。そこでそれを逆回しにするようにして、手前に戻してみる。捨てていくのである。そうすると捨てることのなかでおのずと止まる局面がある。そこでは別様に進むことのできる道が浮かび上がることもあり、またそのままの状態を維持しても、それはそれとして成立しているような場面もある。多くの哲学の学説は、一貫した整合性を求めて、あるいは「純粋」という言葉に魅せられて、小さな完成品に行きついている。そんなとき捨てる勇気をもち、捨てる覚悟で物事に臨んでみるのである。

　人はひとたび獲得したものを無条件で捨てていくことは容易ではない。そんなに簡単に人生はリセットできはしない。みずからの履歴を断ち切ることも容易ではない。一生の間に大きく変わることができるのは、個人差はあるが、二度もしくは三度が限度である。ころころ変わるようでは、いまだリセットでさえない。

　次の進み方が見つかれば、すでに身に付いた知識や構想は、おのずと捨てられていく。だが観点や視点を切り替えるようにして、みずからをリセットすることはできない。観点の切り替えにさいして支点のように残っている、当の切り替え操作を行っている基盤そのものには、何も変化が及んでいないからである。たしかに「学んでも何もわからない、行為することが必要である」（ゲーテ）という言葉は、ここでも当てはまっている。

　しかし次へと進む道筋がたとえ見えなくても、既存の知識や構想を捨てていくことはできる。それはある意味で言葉の出現する場所へと戻っていくことでもある。言葉の出現する場所とは、経験がそれとしてみずからを組織化する場所でもある。経験の新たな組織化こそ、吟遊哲学の課題の一つなのであろう。そのためには（エ）吟遊する哲学は、ある種の詩人でもなければならない。詩を書けば詩人であるというわけではなく、詩を書いていないので詩人ではないということにもならない。言葉の出現する場所にみ、言葉とともに経験が動きを開始し、経験の動きが言葉とともにかたちをとる行為は、いずれにしろ詩的である。

（河本英夫『経験をリセットする　理論哲学から行為哲学へ』による）

問１　傍線の箇所⑴⑵⑶⑷⑸の片仮名を適切な漢字に書き改めよ。

問２　傍線の箇所（ア）「持って行き場がない」とはどのようなことか。本文の内容に即して三十字以内で説明せよ。

問３　傍線の箇所（イ）に「貧窮と寒さに耐えることを歌ったような長詩や短歌」とあるが、なぜそのような詩や歌が作られたと筆者はとらえているか。本文の内容に即して四十五字以内で説明せよ。

問４　傍線の箇所（ウ）「捨てることのなかで初めて見えてくる」とはどのようなことを指すか。本文の内容に即して五十字以内で説明せよ。

◎問５　傍線の箇所（エ）に「吟遊する哲学は、ある種の詩人でもなければならない」とあるが、どういうことか。本文全体の内容を踏まえて九十字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　⑴＝陥没　　⑵＝輪郭　　⑶＝冒頭　　⑷＝培　　⑸＝渦中

問２　Ａ問題に確実に対処するＢ手続きや手順を見つけられないということ。

（30字）

Ａ＝４／Ｂ＝６

問３　Ａ日常の、持って行き場のない思いを感じ取って言葉にし、Ｂその思いに区切りをあたえるため。（42字）

Ａ＝６〔「言葉にする」は必須。〕

Ｂ＝４

問４　Ａこれまで獲得したものを手放していくと、Ｂある時点で Ｃ別の可能性やより簡潔なあり方が見えてくるということ。（50字）

Ａ＝４〔「手放して」は「捨てて」も可。〕

Ｂ＝２〔「時点」は「局面」も可。〕

Ｃ＝４〔「別の可能性」＝２。「簡潔なあり方」＝２。「簡潔」は、「単純」や「純粋」なども可。〕

問５　Ａ哲学が経験のない事態に向き合うには、Ｂ既存の整合性や純粋さの追求を捨て、Ｃ現場での言葉にならない経験をかたちにしようとする中で生み出されるＤ根源的な言葉による思索が必要だということ。（88字）

Ａ＝２〔「事態」は、「自然事象」などと限定されていても可。〕

Ｂ＝２〔「整合性」「純粋」がなければ各減点１。〕

Ｃ＝３〔「かたちにしよう」は、「言葉にしよう」などでも可。〕

Ｄ＝３〔「詩的」など「詩」という言葉を用いると説明にならない。減点２。「思索」は「哲学の構築」「考える」などでも可。〕